

論文の和文概要

氏名 山田 江理男

(博士論文の題目)

近代日本における鍼灸療法の成立と展開
-鍼灸テキストにおける技術の変容に着目して-

(博士論文の概要)

概要

本研究は、わが国の伝統医療である鍼灸療法が近代社会史上、いかに成立し展開してきたのかを、施術の技術に着目しながら当時のテキストの分析を通して詳らかにするものである。鍼灸療法は、明治以降の急進的な近代医学一元化のなかで、医療制度の枠外に置かれ衰退したかのように解され、近代医学史のなかに埋没してきた。これを「脱中心化」した観点でみると、むしろ鍼灸が、いかに近代医学の合理主義に絡めとられずに、その自己保存を保ち得たのかという解釈が可能となる。わが国の近代医学化が医療制度化により実施されたため、従前は社会福祉史や制度史的研究が中心であったが、制度と技術は相補的關係にあることから、「技術」に焦点化して本論課題を検討することとした。

第1章では、江戸期の鍼灸臨床三大書と杉山流三部書及び同真伝流18手術を中心に検討した。江戸期の鍼医は封建制度下で実力本位の特殊身分であり、その鍼の技術は、気をめぐり易くするために刺入前に「口に含み」温め、刺入後は「気を至らせる」事や邪気の排出を目的として各種手技を実施し、刺入時の「ひびき」は気の集合と介され、終始「気」の理念に依拠した技術で構成されていたことについて論じた。

第2章は、明治以降の漢方医学排斥のなかで、鍼灸の技術がいかに変容し、自己保存を保ち得たのか、明治期のテキストを参照して検討を行った。三宅秀の意を体した鍼灸師奥村三策は、「医事新聞」157号(1885)に論文を投稿し、鍼と神経刺激の関係や解剖生理の必要性を提示した。同年、訓盲院からの鍼教育の削除事案があり、後に三宅の指示で東大の片山芳林が意見書を出したが、内容は奥村論文の援用であった。翌年、宮内省侍医岡本元資が「鍼術復興の建白書」を東京府へ提出して「東京鍼灸治會」が発会され、そこで三宅らは祝辞で

様式3号

鍼灸の振興上、生理解剖学を道具とする技術の再構成が前提化された。そして岡本や、鍼灸師河井貞昇らの書が組合員教育テキストとして出版された。ここで内容の大半が生理解剖学となり、消毒法が記載され「口に含む」ことは禁じられ、経絡や気への言及は消失、経穴も新たな名称に置換され、その位置は解剖学的に解説された。1888(明治22)年に奥村は「時事新報」に「鍼治術」を投稿、鍼の効果目的を「興奮、誘導、変化、制止」に規定した。医師大久保適齋は奥村仮説に基づき実験を行い、『鍼治新書』(1894)を著し、鍼を「神経刺激術」であるとした。明治期は、どこか擬態的ではあったが気を「神経刺激」に翻訳し業としての命脈を保ったことが明らかとなった。

第3章では、かつて近代医学一元化を推進した勢力が力を失い、加えて各戦勝などの情勢変化が鍼灸の技術に与えた影響を検討した。1911(明治44)年に、三宅秀の助力を得て旧規則を改め、「鍼術灸術営業取締規則」が制定された。以降、全国的に試験が課され、鍼灸学校の認可設立が増加し、各種の鍼灸教科書が出版された。しかし、関西では伝統的傾向が根強く、鍼灸師山本慎吾の『日本鍼灸学教科書』(1912-13)では、効果目的は奥村説に準拠しつつも経絡経穴と各手技が古典的名称のまま記載された。この時期、気が神経刺激として定着し、ある程度は翻訳されるも、「経穴」を科学的に合理化し得る理論がなかった。しかし、1912年に後藤道雄による「ヘッド帯」と「経穴」の関連の研究が発表され、翌年三宅らは、この研究に基づき「改正経穴調査委員会」を組織、1918(大正7)年に文部省による「改正孔穴120穴」が制定されたものの、業界に大きな反動をもたらした。1922(大正11)年には大阪の車戸喜保医師らが「鍼灸醫師法」を帝国議会に請願し議会を通過した。ここで、鍼灸が近代医学に絡めとられたという疑義も生じ得たが、国粋主義的な社会状況を鑑みれば、伝統を保持しつつ医師化する制度化であり、むしろ、当該請願の議会通過は、鍼灸業の自立を意味した。実際に、福岡桂司『鍼灸技術学』(1923)の出版や、音尾正衛設立の「日本鍼灸専門学院」に学んだ柳谷素霊がその学院での学びと、杉山真伝流を継承する吉田弘道から秘伝を継承し、古典復興運動を開始するなど、鍼灸書に再び気への言及や種々の流派や経絡経穴や古典的手技への言及が増加した。さらに、中山忠直『漢方医学の新研究』(1927)が出版され、そこで中山は改正孔穴は伝統無視の無価値な標準化と断じた。当該書は、古典的鍼灸の再評価を促す漢方医学復興書であり、まさにその象徴であった。本章では、鍼灸が明治末から大正期の社会情勢の変化に応じ、古典復興と業界自立化を成し、明治期に近代医学を取り入れつつも本質的には両義化させていったことが明らかとなった。

各章の検討を通して、次の様な結論を得た。鍼灸が明治以降に近代医学に絡めとられることなくその自己保存を保ち得た要因は、湯薬が薬学に包摂されたように、そもそも近代医学側に転換可能な要素が無かったことなどを背景として、三宅の保護下でその機序を気から神経刺激に翻訳させるという生存戦略を

様式3号

図ったことにあった。ただし、その過程で表層的には生理解剖学等の受け入れなどがみられたが、本質的な部分としての経絡経穴や鍼の手技等については、改正孔穴への強い反動や各種古典手技の復興などがみられたように、決してその合理主義に置換されることはなかった。それは鍼灸の本質的価値であり、明治以降の欧化主義と反動形成(国粹)、アジアの中の西欧というような二律背反の中で、部分的に近代医学理論を摂取しつつも伝統理念や技術の継続性を担保するという並行的に両義化させた形態をとることで、その療法を成立させ展開させてきたことが明らかとなった。